

# 十八世紀ドイツの子どもの本(4)

エンゲルハルトとメルケル編

## 『新児童の友』

佐藤 茂樹

モットーは〈勤勉〉と〈有為〉

はじめに〈なぞなぞ〉をひとつ紹介しましょう。

同じ日に生まれたふたりの男の人が、同じ時に亡くなりました。ふたりとも五十五歳でした。でも、一方は他方より四〇年長く生きたのです。

作中の子どもたちは、この言葉の意味を解くように言われて戸惑います。口々に「ありえない」と言いながらも、どこかに合理的な糸口があるはずだと考えて、答えを試みる子が出てきます。ひとりの答えは、一方はずっと病気だったので、生きている喜びをもう一方より味わえなかった、というものでした。言うなれば、不本意な無為の時間に同情を込めての推論で、これは女の子の答えです。もうひとり

は、「生きる」という言葉の意味を「年齢を重ねる」と「有為に時を過ごす」という二重の意味で考えなければならぬ、と答えます。四〇年間の差はふたりの生き方、すなわち時間の有効な使い方によって生じる内実の差である、というわけです。こちらは男の子です。問題を課した先生は後者の答えを正解としますが、居合わせた大人のうちからは前者にも味方が現れます。一律な判定を下す前に、真面目な発想ならひとまずその趣旨を汲むべきだということでしょう。結局、正解者に約束された褒美は両者が分け合うことになり、先に正解とされた方の子も喜んでそれを認めます。

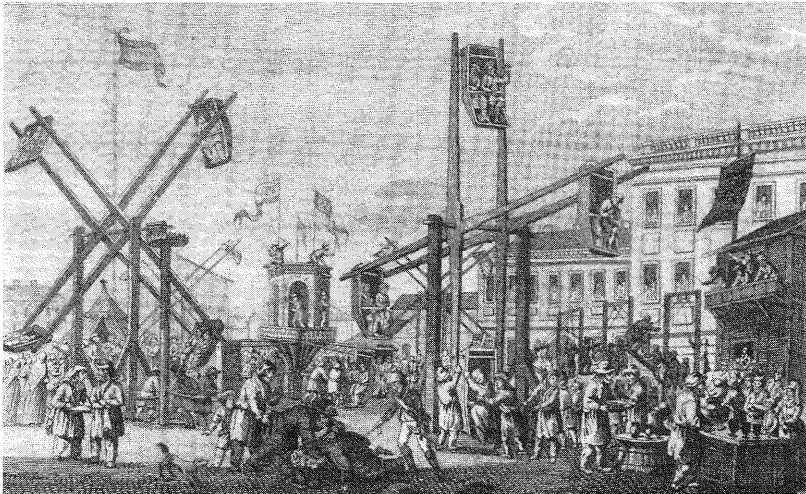
こうして、ひとわたり考えを出し合って、それぞれの理を認め合った後で、みんなで合理的な解答を検討する段に移ります。大雑把に結論だけ述べずに、数字を確認し合いながら一歩一歩進めるところが肝心です。まず十五歳以前の年数は計算に入れな

いことにしますが、これはまだ社会の一員としての役割が問われる以前だという理由からでしょうか。次に、便宜上ふたりを区別する名前を考案することにし、一方をミユラーさんと名づけます。これには「粉屋」の意味があり、名づけ方にも勤勉に肩入れした感じが窺えます。こちらの睡眠時間は、二十二人から五時までの七時間。身支度をしたり、食事をしたり、息抜きをしたりといったことに五時間使うとします。残った時間は十二時間で、これが仕事（社会にとつて有為な活動）に割り当てられる時間です。もう一方をファルベルクさんと名づけますが、ファルは「転落」とか「墮落」、ベルクは「山」の意味です。きちんとした形あるべきものが崩れた印象が伴いますね。こちらの睡眠時間は、二十一時から七時までの一〇時間です。犬と遊んだり、おしゃべりしたりすることに八時間を使うので、残り六時間。こうして仕事に使える（公共性を有す

る) 残りの時間を比べると、有為な人生を生きだ密度に二倍の差が生じるという計算になります。したがって、生を終えた五十五歳から潜伏期の十五年を差し引いた四〇年分だけ、ふたりの生涯の内実に差がでるといふ答えが導き出されることになるのです。

計算が終わり、小さな時間の積み重ねが長い年月の中では大きな違いとなって現れるのがわかったところで、みんながいろんなことを言い始めます。一日の時間の配分はどうあるべきか、休息の時間にはどのような意義があるのか……こうしてへなぞなど〜で始まったこのエピソードは、合理的な解答の引き出し方を経て、時間といかに上手に付き合うかという話題に発展し、おしまいに「時間の使い方」という歌になって幕を閉じます。

このエピソードでは、市民社会の後継者たる子どもたちに課せられたふたつの特徴的な価値観が語ら



れています。ひとつは、合理的な推論の積み重ね。もうひとつは、社会的存在として求められる日々の勤勉と有為。これらをへ社会的な時間〉の特性、すなわち個人の生活に規律を与えるときにもその個人を社会の規範に結び付けて共同性を作り出すへ時間〉の働きと絡めて提示した点に、今回紹介する書物の象徴的な一面を認めることができましょう。

### すべては家族の会話の中で

こうしたエピソードを満載した児童誌『新児童の友』は、カール・アウグスト・エンゲルハルト（一七九一—一八三四）とダンケゴット・イマヌエル・メルケル（一七六五—一七九八）というふたりによって編纂されました。十八世紀も終わりに近い一七九四年から一七九八年にかけてのことです。全部で十二巻を数え、本篇の完結後には『新児童の友の家族の往復書簡』（一七九九—一八〇二）という補

巻六巻を加えています。各巻は、平均一五〇ページほどの分量で、銅版の扉絵と本文のエピソードにまつわる口絵（異民族によるアザラシの捕獲場面など）、それに作中に出てきた歌の楽譜（二葉（先ほどの「時間の使い方」の歌や子ども向けに改作したモーツァルトの「パパゲーノの歌」など）といった体裁。絵は、細部の情報をきちんと伝える趣旨で描かれ、今日の写真の役割を果たす性格のものです。内容は、地誌、博物誌、異国の風俗、諸階級の実態、論理的・自然科学的な観察法や思考法、市民としてのモラル……市民階級の後継世代の育成に必要なさまざまな知識や情報が、ある家族の会話を通して読者が一緒に仮想体験するようなスタイルで提供されます。

ある家族の交わす会話——十八世紀の児童書の特徴付けるのがこの〈枠〉の構成であることは、これまでも何度か述べました。このシリーズものの見

童誌では、毎回取り上げられる材料が内容的・形式的に多岐にわたる（言葉遊び、日記、旅行の報告記、劇、等々）だけに、この構成が全体に統一を与え、合わせて次篇への関心を持続させる役割を果たしています。しかし、それだけにとどまらず、ここに描かれた家族のあり方そのものが市民家庭のひとつのモデル・ケースを示していると言えるでしょう。この家族は、両親と子どもからなる〈小家族〉で、血縁のない他人はおろか祖父母の世代も含みません。語り手を兼ねる父親は、職務の時間を家庭に持ち込まず、晩には子どもと過ごし、友人を迎える時間を必ず確保しようと努める市民社会の新しい父親像を示しています。出番のないに等しい母親とは好対照の姿です。

その父親が紹介する子どもたちは――

グスタフ（長男、十四歳）…六、七歳の頃からお

もちゃの類には興味を示さず、読書に専心。歴史、地理、文芸、言語、博物が好き。兄弟の中で唯一、一人部屋を与えられている。将来は大学での勉強を希望。知ったかぶりが欠点。

アグネーゼ（長女、十二歳）…だらしなく、投げやりで、けんか腰で、生意気な女の子の見本。「きちんとした女の子」という劇での失敗をきっかけに自省し、その性格を改める。その後、母親の家事の手伝いもするようになる。ピアノが上手で、きれいな声の持ち主。

エリーゼ（次女、十一歳）…粗野で、激しやすくて、でしゃばりで、ときに服装がだらしなく、知りたがりの度が過ぎるが、家庭的で、心根の良さが一番。市場の出版物に通じており、学校より台所を持ち場と考える。わずかな持ち物を貧しい者に喜捨。

エドゥアルト（次男、九歳）…物静かで、友愛的。学校が好きで、放課後には工作に熱中する。覗きからくりなどの想を凝らしたものを作ることができる。この方面に職業的資質。コミュニケーションの意志に欠けることや生活の安逸さを求めすぎることが欠点。

フランツ（三男、八歳）…快活で、敏捷な身体を持ち、じっとしている遊びが嫌い、家中をかき回す。授業の後はひたすら兵隊ごっこに熱中し、実体を知らずに兵士に憧れているところがある。実際の兵士になるには、快不快に左右されすぎたり、怖がりであったりと、数々の欠陥がある。

ハインリヒ（四男、七歳）…まだ特記すべき状態にまで成長していない。算術が好きで、遊びの中にも、商人の素質の片鱗を見せる。旅行記を愛読。

子どもたちは、一様に克服すべき欠点を合わせて持っています。折に触れてその自覚と克服の過程を読者の前に示すことが重要だからでしょう。その背景には、未完成ではあるが、完成への能力を備えた存在としての子どもを観を窺うことができます。また、性差に基づく期待値の違いはこの短い人物紹介からも明らかでしょう。男児には、将来の社会の一員として分け持つ役割への資質が書き込まれています。

これに家族の友人が四人加わり、訪問したり、自分の所領に招待したりするたびごとに子どもたちに新しい話題と知識をもたらし、経験と視野を拡大する役割を担います。年齢は明記されていませんが、このうち退役大佐はこの家族には欠けている祖父の世代とそれにふさわしい知見を補うと考えてよいでしょう。父親の世代に属する友人がふたりいるのは、学友同士で年齢が近いという単純な理由にはと

どまりません。ここにも〈父〉の世代こそが模範、という考えが顕著です。そして、そのふたりも、子どもたちへの影響の点では、対照的に補い合う関係にあります。ひとりは、窮乏や病弱という逆境に屈せず、模範となりうる人格を形成してきた人物で、子どもたちの家庭教師にして「第二の父」。もうひとりは、恵まれた条件の下で一切の生活上の労苦に煩わされずに経験と教養を身につけてきた資産家の顧問官。どちらの影響も欠かすことはできません。四人目は、それより若い世代に属する商人。冒険的航海で財を成す物語を真似て辛酸を舐めての今日があり、若いときに無茶をした分だけ、子どもたちの現状に理解を示しながら、自分の過ちを苦い教訓として伝えることのできる人物ということになります。

こうした登場人物たちの間で、その都度ひとつの話題が、実態を知ることにより、起源・語源へと溯り、背景の現実を目を向け、他国との比較へと発展していきます。そうした時間と体験を重ねながら、年長の子どもたちが家族を離れ、それぞれの社会に旅立つところで、この児童誌そのものも巻を閉じることになります。長男は学校に上がり、次男は指物師の親方の下で修行をして……という具合に。

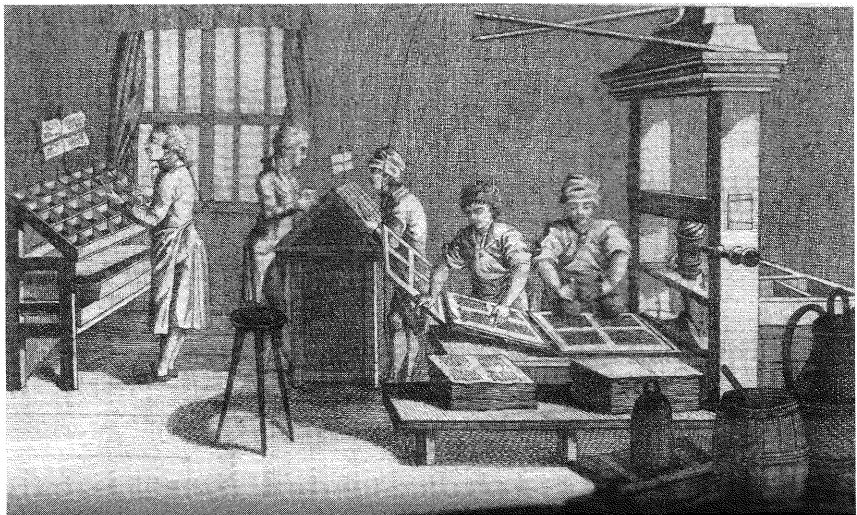
### 十八世紀的児童書の完成と終焉

十三歳を迎えた次男は指物師に弟子入りしますが、この点には少しこだわってみる必要があります。というのも、階級的な境が閉じていた当時があつては、この書の受容者に想定される子どもたちが現実に職人という将来を選ぶことはなかったと考えられるからです。では、職人になるというこの設定にはどのような意図が秘められているのでしょうか。

この書の特徴をなすのは、上の階級である貴族に対する批判的な描写と対照的に、下の階級の人々の生活実態への関心の喚起です。例えば、父親に連れられて子どもたちは採石場を訪れ、そこで過酷な労

働に従事する人々が粉塵と過飲によつて四十歳を待たずに生涯を終える現実に接して驚きます。ひと時の憂さを晴らすために健康はおろか生命をも軽視する暮らしぶりを見て、容易には変えがたい現実同情を寄せながらも、自己の現状を改善していく視野が欠如している人々の悲惨を痛感して、帰途につきまます。またあるときは、印刷所を見学して、熟練を必要とする手仕事に従事する人々がいかにヨーロッパ世界の達成してきた文明を下支えしているかをつぶさに体験します。そうした中で、自分の知識を鼻にかけ、職人の子どもを軽視する長男は、将来自分が引き受けるつもりでの知的な役割が社会の必要とする役割の一部にすぎないことを思い知らされることとなります。

この書に満載された新知見のいわば下絵をなすことうした描写は、実は、当時まだ形成途上にあつた市民階級のアイデンティティの模索と不可分なのです。世襲的に継承するものを持たないこの階級は、





その拠り所を貴族のように血縁・出生に求めたり、ギルドの手工業者のように独占化した職能に求めたりすることはできません。それだけに、他の階級に対してその理念的な独自性を主張して差異化を図ろうとする自意識が強いものとなります。そして、その意識の核心をなすひとつが、他の階級の労働を収奪せず、他の階級の労働を正当に評価できるという確信でした。この確信は、「市民であること」がもつとも普遍的な人間の在り方に繋がるといふ私たちの拠り所を支えるものでした。しかし、これは貴族が代々受け継ぐ所領のような生得のものではありませんから、常に努力して自己形成し、教育によつて後世に継承しなければならなかったのです。次男の職業選択には、市民階級の置かれたこのような事情を理解する必要があります。自分たちが現実には就くことのない職業を選択するという描写には、一種の階級的な義務感の物語的表現を認めることができますでしょう。

この書は、十八世紀の児童書の理念と形式のひとつの完成像を示しています。しかし同時に、すべてがお膳立てされた読書という形がそろそろ終わりに近づいている印象も否めません。ひとつの雛型を完成にこぎつけている分だけ、子どもと書物との新しい関係の子兆が窺えると言ったら、あまりに後付け的な見方になりました。その新しい関係とは、大人の管理下で公認済みの良書を与えられるのではなく、一人の場所で自分も周囲も忘れて読みふけるというものです。精神の一人立ちには、ある種の違反の気持ちに伴うような読書の仕方がどうしても必要なのでしょう。その需要を満たす物語の登場もそれほど先のことではありません。いずれ修正される便宜的な欠点を付与された優等生に代わって、魅力と不可分ないささかへ危険な主人公が階級的期待から解放されて跳梁跋扈する時代への一步は、まもなく踏み出されることになるのです。

(関東学院大学)